特級魔法使いの苦悩

鳥籠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
特級魔法使いの苦悩

【Ｎコード】
Ｎ５６１５Ｖ

【作者名】
鳥籠

【あらすじ】
２年半前、宮廷を脱走した王子兼特級魔法使いレイティスは現在、じゃがいも畑で農家をしていた。レイティスは自由を手に入れてこの暮らしに満足していた。しかしある日、レイティスは２年半使っていなかった魔法を使ってしまう……。

第1話　置き手紙

ここはラストラル王国の宮廷。その中の王族のみが暮らす一角……。

「メ、メイティス様ぁぁあああっ！！！」

宮廷の果しなく長い廊下を一人のメイドが絶叫しながら駆け抜ける。メイドは一枚の紙を持ちながら国王、『メイティス・A・ラストラル』の私室へ走った。

コンコンコンコンッ！

凄い勢いでノックがされ、書類に目を通していたメイティスはドアの方を見た。そして、　返事をする前にメイドが無礼にも扉をバンッと開け放った。

メイドは慌ててくしゃくしゃになった紙をメイティスに突きだした。

「メ、メイティス様！これを見てくださいっ！」

「なんだ？これは。」

メイティスは紙をメイドから受け取り、目を通す。

「父上、母上へ。

わたくし『レイティス・S・ラストラル』は王位継承権を破棄、共に特級魔法使いの称号の破棄をここに記します。」

「……っ！！」

メイティスは目を丸くしたまま絶句した。そして、その紙の下に小さく2行の短い走り書きを発見する。

「P．S
王族という肩書きを棄てるため、わたくしレイティスは宮廷を出ますので、決して探さないで下さい。」

全て読み終えると、その手紙はメイティスの手の中で灰となった。
「メイティス様……？」
メイドはぷるぷる震えるメイティスを伺い、俯いた顔を覗きこもうとした瞬間…「キャッ！？」
メイティスは椅子を倒して突然立ち上がった。それに驚き、メイドが飛び跳ねる。構わずメイティスは顔を真っ赤にして叫んだ。
「この馬鹿息子がぁぁぁあああ！！！！」

第2話　じゃがいも畑にて

宮廷を脱走してから2年半がたった。
ここは宮廷の在った王都から馬でも3日はかかる処にある、じゃがいも畑が延々と広がる農家である。
ギラギラと日差しが照りつけるなかをレイティスはつなぎを土で汚しながらじゃがいもの収穫をしている。
そして、宮廷で『王子』をやっていた時はレイティス・S・ラストラルとして生きてきたが、今はただの『レイティス』として生きている。

そう、俺は地位をあの時に全て棄てたのだ！
レイティス・『S』・ラストラルの『S』は特級魔法使いにしか与えられない称号（特級魔法使いは現在、この世界にたったの8人しかいない。また、名前の間のアルファベットは魔法使いのランクによって与えられる称号。A級～D級が一般的だが、A級の中でも飛び抜けて技術が高い者にのみ特級であるSの称号が与えられる）。
そして『ラストラル』という王族の肩書き。その2つを破棄するということは、この王国にとって非常に重要なことを意味するのだ。
1つにラストラル王国にただ一人の特級魔法使いの損失。2つ目に、メイティスの一人息子及び第一位王位継承者の脱走。この2つがいっぺんに起こった宮廷内はひどく混乱したらしい（新聞を見て知った）。
レイティスが脱走した後、こんな遠くまで王子捜索隊が来ていた。まぁ、脱走する前に魔法で自分の顔を変えたりしたので見つからなかったが（脱走した後に魔法を使うと魔力探知機に見つかるからあれから一度も魔法を使っていない）。

そんなわけで、今は一人でじゃがいも畑で泥だらけになって働いている。
最初のうちは苦労したが、今となればスムーズに仕事が出来るまでに成長した。宮廷に居た頃はこんな仕事をしたことが一切なかった自分が、一人でここまでやってのけたのだ。これならこれからも暮らしていける。自由に――…。

第3話　魔法

レイティスはいつも通り泥だらけになりながらじゃがいも畑に居た。
「…今年は大量だな。」
収穫したじゃがいもの山を見て呟く。このじゃがいもはこの国の様々な地域で売られている。勿論、王都でも売っていて、父上や母上も口にしているはずだ。
レイティスは、まさか息子が汗水垂らして作ったじゃがいもを食べているとは思わないだろう。それを考えるだけでクスクスと笑う。
日が暮れてきた。
そろそろ今日の収穫はやめて家へ帰ろう。そう思った時だった。
「レイティス！」
１００メートル先で手を振りながら駆けてくる少女が居た。彼女の名は『リリィ・シュウリン』。歳は１６。長い金色の髪を緩く結わいている。
「久し振り、レイティス！」
「これはこれは、シュウリン侯爵令嬢…。お帰りになったのですか？」
リリィは2級貴族の令嬢。レイティスはただの農家として暮らしているため、畏まる。そんなレイティスをリリィは頬を膨らまして言う。
「レイティス！二人きりの時は敬語は止めてと言ってるじゃない。…それと、侯爵令嬢は止めて。リリィでいいの。」
レイティスは苦笑する。そして方膝を折り、小さなリリィが見上げない形にする。
「…リリィ様。貴女とわたくしには身分の違いが有ります。恐れ多くて敬語を外すことは出来ません。」
リリィはふぅとため息を吐くと、諦める様に笑う。

「まぁ、リリィ様だけで今は許してあげるわ。」
「ありがとうございます…。さぁ、ここは暑いでしょう？中へ入って下さい。」
「えぇ。」
二人はレイティスの小さな家へ向かった。

「どうぞ。」
レイティスはリリィに小さな紅茶の入ったカップを渡した。それを優雅に頂く。
ここはレイティスの家。中には、中央に机と二脚の椅子。隅には質素なベッドと本棚があり、それ以外にはこじんまりとしたキッチンがあるだけという家だ。
　そんな質素な家には似つかわしくない高級なレースをふんだんに使ったドレスを着たリリィが、チョコンと椅子に座っている。その向かい側には簡単に着替えを済ましたレイティスが座っている。
「リリィ様。今回はどちらに行っていらしたのですか？」
「王都よ。お父様が宮廷に用が有ったから着いていったの。」
「宮廷…ですか。」
レイティスは一瞬顔を曇らせたが、すぐに笑顔で返す。
「それで、舞踏会には出席を？」
リリィは顔をしかめて怒った様に言った。
「それがね、お父様ったら舞踏会の参加申請をしわすれたのよ！…せっかくあんなに遠いところまで行ったのに。」
リリィはカップを静かに置き、でもね、と話を続ける。
「でもね、色々面白い情報が手に入ったのよ。」
リリィは情報収集が上手い…と言うよりもそれが好きなのだ。だからレイティスが突然ここに来たのを知って、興味本意に訪ねてきたのだ。それからリリィはレイティスが気に入り、身分を気にせず暇があれば遊びに来ている。

リリィは目を輝かせて続けた。
「本当かどうか分からないけど、2年前位に失踪した王子のこと、覚えている？…ほら、レイティスと同じ名前の。」
知らないわけが無い。それは自分なのだから。まぁ、顔は魔法で変えてあるので分かる筈はないが…。まさかこの手の話がくるとは思っても見なかったレイティスは戸惑いながら返事をする。
「でね、その王子が失踪してから病気にかかって国王は弱体していったんだって。…もう数ヶ月しか持たないらしいんだ。それを見た王妃様はちょっと前に、王子を全力で探して宮廷へ連れてくる様に命令したんだって。しかも命に関わらなければ傷つけても良いって……レイティス？」
父上が、あと数ヶ月の命！？レイティスはショックで青ざめた。
心配したリリィは青くなったレイティスに触れようとした。
「レイティス？だ、大丈夫？」
…―触れた瞬間。
「触るな！！」
レイティスはリリィを思い切りはね飛ばした。
レイティスが我に帰る頃には、リリィはキッチンのある壁に勢いよくぶつかった。その衝撃で上の棚がリリィ目掛けて落下した。
「リリィ様っ！！！！」
レイティスはリリィの所へ駆け寄り、落下した棚を退けた。…幸いにも、頭に大きな外傷は無いようだ。しかし―…。
「…あぁ。なんてことだ…！」
脇腹に、上から降ってきた果物ナイフが刺さっていた。致命傷ではないものの、このままでは危険だ。
「レ…イティス？…うっ！！」
リリィは脇腹の痛みに呻いた。
「あぁ…。リリィ様！わたくしのせいで……」
…『また』、『また』俺のせいで人が死んでしまう！！
俺が焦ったせいで周りが見えなくなっていた…。

スッと頬を撫でられた。
「…レイティス……だ、大丈夫？」
「……っ！」
この人は、自分の心配ではなく俺を心配するのかっ！　そんなリリィを見てレイティスは思った。

…―この人を助けなくては
レイティスはリリィの脇腹に刺さったナイフから出ている血を見てから言った。
「…リリィ様。痛いかもしれませんが、我慢して下さい。大丈夫。わたくしが必ず助けます。」
そう言ってレイティスはナイフの柄を持って一気に引き抜いた。血が大量に吹き出る。直ぐにレイティスは傷口に両手を置き、２年半振りに短い呪文を詠唱した。すると、両手を中心に青い閃光を放ちながら魔方陣が現れる。レイティスの手に力がこもる。
「…クソッ！魔力が安定しない！！」
久し振りに魔力を使ったのだ。安定しないのは当たり前だろう。そのせいで貯まった魔力が多目に放出する。それでも順調に傷口は回復し、血が止まっていく。
「…あと、少し……。」
傷後が完全に消えた。
レイティスは額に浮かぶ汗を拭う。
「…リリィ様。」
リリィは驚きに目を見開いたまま傷があった所を擦る。
「…治ってる？」
それからレイティスを見た。レイティスはビクッとして身を引いた。
リリィは震える声で言った。
「……貴方、魔法使いだったの？」

レイティスとリリィの中で、何かが崩れた気がした。

第４話　交換条件

あれから数分たった。
二人は椅子に座り、黙りこんでいる。リリィは脇腹を擦り続ける。
先に口を開いたのはリリィだった。
「…何故、あの時あんなことをしたの？」
レイティスは喉の奥がつっかえる感じがした。
「さっき、貴方は私が国王陛下の話をしたら、顔が真っ青になった。…どうして？」
「……」
「黙っていたら、分からないわ。」
レイティスは本当の事を言おうか迷っていた。…その時。

コンコン―…

軽く誰かがドアをノックした。二人はビクッとしてドアを見た。リリィは出ようとしないレイティスの代わりにに席を立ち、取っ手に手を掛けた。その瞬間、レイティスは思い出した様に椅子を倒して立ち上がり、リリィに大声で叫んだ。
「開けちゃいけない！！」
「え？」
遅かった。
リリィがドアを開けた途端、滑り込む様に仮面をした全身黒装束の人々が１０人ほど家の中へ入ってきた。仮面の人達はレイティスを囲む様にして丸くなった。
その後、遅れて一人の女性が入ってきた。女性は軍服に身を包み、長く青い髪の前髪を押さえる様に赤いバンダナを斜めに着けている。そして腰に吊るしてある細身の剣を抜き、それをレイティスに向けた。

「2年半振りに御目にかかります。レイティス・A・ラストラル殿下。…そのお姿はなんです？みずぼらしい。」
レイティスは舌打ちをした。
まさか、こんなに早く来るとは…。
「いやはや、驚きましたよ。2年半も魔法を使わずにいたのに、どうしたのです？突然使って我々に見つかるなんて。陛下は魔力が強いのですから、魔力探知機に一発で引っ掛かりましたよ。……さぁ、帰りましょう？」
レイティスはドアの隅で訳が分からないといった様子で見ているリリィに目で訴えた。逃げろ、と。
それを素早く感じ取ったのはリリィではなく、軍服の女性だった。
女性はリリィを捕まえ、首に剣を突きつけた。
「ヒッ！？」
「ほぅ？貴女はシュウリン侯爵令嬢のリリィ様ではないですか。この前は舞踏会にご出席出来ず、残念でしたね。」
それを見たレイティスが口を開いた。
「…リリィ様を離せ。」
「おや？やっと喋りましたか。話せなくなったかと思いましたよ。」
レイティスは殺気を込めて再び言う。
「リリィ様を離せ。その人は関係無い。」
「…離しても良いですが、無条件ではこちらも困りますね。」
あちらの条件は分かっている。レイティスを宮廷に返すことだ。
レイティスはリリィを見捨てて自分が逃げる事は出来る自信はある。
…しかし、リリィを見捨てることは絶対に出来ない。あの人を自分の事に巻き込ませたくはなかった。そして、これからも巻き込ませたくない。レイティスの頭の中で、選択肢は1つに絞られた。
「…ならば、俺を連れていけば良い。」
女性はニヤリと笑った。

第5話　王子

「俺を連れていけば良い。」
女性は満足そうに笑い、レイティスに言った。
「そう言ってくれて助かります。…あぁ。あと、その姿をどうにかして下さい。」
レイティスは2年半も纏っていた魔法の仮面を壊した。
さっきまでは黒く短い髪で、顔付きは農家の息子といった感じの少しいかつい容姿だった。
しかし、今は本当の『レイティス・S・ラストラル』だ。肩までかかる髪は、美しい月のような銀色。スラッとした顎に高い鼻をもつ美しい王子。2年半前と全く変わらない姿。
リリィはその姿を見て思わず呟く。
「…レ、レイティス…殿下？」
レイティスは『殿下』と呼ばれて胸が少し痛かった。
「…すみません、リリィ様。このような事に巻き込んでしまって。」
リリィはふるふると首を振る。そんなリリィを見てレイティスは美しくも痛々しい笑顔を浮かべた。そして、リリィを捕まえる女性を睨む。
「魔法は解いた。さっさと連れていけば良かろう。…それと、リリィ様を早く離せ。俺は一切抵抗はしない。」
女性はリリィをゆっくりと離した。そのままリリィは床にへたり込んだ。
「連れていけ。」
女性は仮面の人達に命令をし、家を出た。仮面の人達はレイティスに近寄り、一人が手を使えないように魔法で拘束した。そして、レイティスを囲んで外へ出ようとする。
リリィは思わず叫んだ。
「…レイティス殿下！」

レイティスはリリィを悲しい眼差しで見た。
「…どうか、わたくしを殿下と呼ばないで下さい。」
そうしてレイティスは外へ連れ出された。

リリィはやっとの思いで立ち上がり、外を見た。
そこは、延々とじゃがいも畑が広がっているだけで、人影は１つも無かった。

第6話　宮廷

目を覚ますと、昔見覚えのある天井が視界に現れた。
「……宮廷？」
あぁ、そうか。俺は宮廷に戻されたのか。
レイティスは記憶をたどる。家を出て直ぐ、あの女と仮面達に睡眠魔法をかけられた。
ムクッと起き上がると、酷く身体が重い事に気づく。久し振りに魔法を使ったからだろうか？しかし、その推測は直ぐに消えた。この部屋中に強い結界が張られている。しかも、この結界は中から出られないように、レイティスの魔力を吸収して持続するややこしい代物だ。レイティスはベッドが密着している壁に手を伸ばす。触れた瞬間、バチンッと電気が走る。
「…逃げられないと言うことか。」
大きなため息を付きながらバフンッとベッドに倒れこむ。ふと、レイティスの頭の中でリリィが思い浮かぶ。あの後、リリィは何もされてないといいのだが……。

…―ガチャン。

ドアが開かれる音がして、レイティスは身体を起こす。そこには、ニヤニヤと勝ち誇った笑みを浮かべる国王、メイティスが立っていた。
「父上！」
レイティスはリリィの言っていた事を思い出した。
…―国王の命は数ヶ月しかもたない。
しかし、メイティスはどう見てもピンピンしている。レイティスが不思議そうな顔で自分を見ている事に気が付いたメイティスは言った。

「私が死にそうに見えるか？」
「……っ！！」
あれは嘘だったのか！！
メイティスはわざとその様な噂を流してレイティスを動揺させようとしたのだろう。そしてそれは見事成功した、というわけか。
「…レイティス・Ｓ・ラストラル。お前の名だ。」
「いいえ。俺はその両方の権限を破棄しました。今はただのレイティスです。」
メイティスはゲラゲラと笑った。
「…それを認めるか否かは私《国王》が決めることだ。」
「……。」
ここまで国を騒がせた俺に、まだ第一位王位継承権の継続と特級魔法使いをやれと言うのか。まぁ、それも仕方がないのだろう。王妃はレイティス以来子を生んでいないし、特級魔法使いだってこの国にはまだレイティスのみだ。
　メイティスを睨み付けながらレイティスは訊ねた。
「…父上。何故、今になって俺を呼び戻したのですか？…しかも、ゴーレムを使ってまで。」
ゴーレム…。レイティスを捕まえに来た仮面の者達。あれは人の形をした人形に下級悪魔を閉じ込めて契約者の思いのままに操る物だ。
　あれが来るとは思わなかった…。
「何故だと？…レイティス。覚えていないのか？」
「覚えていない……？」
レイティスは全く心当たりが無かった。その様子を見たメイティスは呆れながら言う。
「…お前は今年で１８歳になる。と言うことは、王位継承権の決定が法により認められる。…それと、これは別の話だが、ソロモン７２柱の中の１柱の結界がもろくなってきた。その結界の再構築の依頼だ。」
「王位継承権の決定！？…な、何故今なのですか！」

「今言っただろう？お前は今年で１８だ。…私がいつ倒れても良いように準備は早めにしなくてはならないからな。」
「だからって！！」
「黙れっ！」
メイティスが怒鳴った。レイティスは抗議を噛み殺す。メイティスは落ち着いて言い放った。
「今から１０日後、王位継承式を執り行う。あと、今から３日後には結界の再構築を頼むぞ。…これは特級魔法使いの義務だからな。」
メイティスはそれだけ言って退室した。

レイティスはベッドに再び身体を預けた。
帰ってきて早々に王位継承式だと？せっかくあの時、自由を手に入れたというのに…。
王位継承式も非常に重大だが、それより困るのは結界の再構築だ。２年半ぶりに魔法を使ったんだ。こんな大仕事を３日後だと？無茶苦茶だ。

考えるだけで頭痛がする。
レイティスは考えるのが嫌になり、そのまま眠った。

第7話　義務

レイティスが宮廷に戻されてから2日目。
レイティスは魔力を安定させる為、丸1日ベッドの上であぐらをかいて目を閉じていた。こうする事で、自身の体内を巡る魔力の動きを把握し、使い方を改める。以前（2年半前）とは違い、長期間魔力の放出がされていなかった為に体内を巡る魔力の量が多くて非常に扱いにくい。…この状態で結界の再構築は危険だ。
レイティスは魔力の量を少し減らすために、自分を囲む部屋の結界に魔力を流し込んだ（この部屋の結界はレイティスの魔力をすいとりながら持続する）。
そんな事を1日がかりでやったレイティスはやっと安定した魔法を使えるようになった。
「…明後日までには結界の魔方陣を構築しなくては。」
明後日はソロモン72柱の中の1柱の結界を再構築しなくてはならない。それは特級魔法使いの義務。断るわけにはいかない。

…―ソロモン72柱。
それは古代、偉大なる魔法使いソロモンが封じたとされる悪魔達。全部で72柱が存在する。その72柱は現在、4ヵ国それぞれに分布しており、ここラストラル王国には27柱が封印されている。
そしてソロモンが亡くなった後、ソロモンの結界は徐々にもろくなって行きつつあり、管理が必要となった。そこで、現在は各国に居る特級魔法使いがその結界の管理をしており、結界の再構築を任されている。すでにラストラル王国の27柱全ては、一度は結界の再構築がされている。

レイティスが結界を再構築する悪魔は序列44（ゴエティア参照）の『シャックス』。最後にコイツの結界が再構築されたのは確か、

１００年以上前だ。普通は１０００年は持つはずだが…。以前の術者の結界が脆かったのだろうか？

「…明日、魔方陣の構築をしよう。」
レイティスはひとまず眠る事にした。

宮廷に連れてこられて3日目、明日が結界の再構築をする日―…。
レイティスは朝陽が昇る少し前に起床した。
メイドに持って来させたコーヒーを飲み干す。そして寝巻きから普段着（宮廷に居るときに着る物。黒い生地で、長ズボンに上着は裾は踝より少し上で袖口が大きく振り袖の様なもの。金色の細い紐を緩く腰辺りに巻く）に着替える。
部屋の中央にある大きな机にこれまた大きな分厚い紙を広げた。
そして、引き出しの中から使い古した羽ペンとインクのたっぷり入った壺、巨大なコンパス、様々な形の定規を先程広げた紙の上に１つづつ置いた。
そして長い袖口を捲り、大雑把に髪を結い上げる。
「よし、やるか。」
レイティスは意気込み、巨大コンパスを手に取った。

第8話　エーラン

「レイティス様。お時間でございます…。」
「あぁ。分かっている。」
魔方陣の再構築の日。
昼頃になってメイドが時間を知らせに来た。
レイティスは昨日完成させた複雑な魔方陣か描かれた厚い紙を持って、部屋の奥にある唯一何もない広い空間で呪文を詠唱する。すると、レイティスを中心に魔方陣が青白い光を放ちながら現れた。次の瞬間、目映い閃光が部屋を覆い尽くした。閃光が消えると、その部屋には誰も居なかった。

…―西の端、『エーラン』
レイティスは魔法で宮廷から数千キロ離れた、『エーラン』に来ていた。
『エーラン』。そこは地名では無く、施設の名前だ。エーランは直径１０００メートルの丸型で、大きな半分の丸いカプセルが被さった外見をしている。何故丸い施設かと言うと、エーラン自体が巨大な魔方陣なのだ。
エーランの中には、ソロモン７２柱の２７柱の悪魔がまとめて封印されている。一応全ての悪魔には何重もの結界が張られているが、念のため全てを施設内に入れ、その施設全体を魔方陣にしたのだ。そうすれば自らにかけられた全ての結界を破って悪魔が出てきても、巨大魔方陣で構成された結界は強力で時間が稼げると言うわけだ。実際、この巨大魔方陣が発動した事は無いので、本当に時間が稼げるかは誰も知らないが…。
「…レイティス・Ｓ・ラストラル様ですな？」
突然、背後から初老の男に声をかけられた。レイティスは一瞬身

構えたが、すぐに小さくため息をついた。
「『アイティン』か。…いい加減突然後ろから話し掛けるのは止めてくれないか？」
男…アイティンはこのエーランの番人。１級魔法使いだ。赤と黒の軍服に身を包み、細身の剣を腰から下げている。
アイティンは再び問う。
「貴方は、レイティス・Ｓ・ラストラル様ですかな？」
レイティスはため息をついてそうだ、と言う。
「お待ちしておりました。…随分と久しいですな。少し話したいことがありますが…今は時間が無いので。さぁ、どうぞ中へ。」
アイティンはすたすたとエーランの中へ入って行った。レイティスも彼に付いて行った。

『序列４４番シャックス』鉄板にはそう彫られていた。
ここはレーラン内に２７ある部屋の１つ。ソロモン７２柱序列４４番シャックスの封印場所。
「レイティス様。よろしくお願い致します。わたくしはこちらで待っておりますので。」
「分かった。……アイティン。」
「何でしょう？」
レイティスはポケットの中から小さな巾着を取りだし、アイティンに渡した。
「これは？」
「『爆破の魔法』の呪文を込めた宝玉だ。…もし、俺が失敗したらこれを悪魔へ投げてくれ。そうすれば俺と悪魔は消滅する。」
「……かしこまりました。」
アイティンは理由は聞かずに懐に巾着をしまった。
レイティスは部屋の鉄の扉をゆっくり開いた。
「お気をつけて。」
アイティンの声は、閉まる扉の音で掻き消された―…。

第9話　深い闇の中の声

闇ー…。
自分の手すら見えないほどの濃い闇の中、レイティスは迷うことなく1点を見つめていた。
そこには、ボゥッと赤黒く不気味に光る膝くらいの高さの古びた壺が在った。
壺にピッタリはめられた蓋にはぼろぼろだが、かろうじて形を残している封印の呪文がぎっしり詰まった紙が無造作に、かつ隙間なく貼られていた。また、その壺の周りには精密な魔方陣が3重にもなって張られている。
…もうあの最初の結界（壺に貼られたもの）はほとんど効力を成さないだろう。
最初の結界が破られるという事は、一刻も早い新たな結界の再構成必要。
レイティスは壺にゆっくりと近づいてゆく。

『ー…やっと来たか。』
「！？」
突如、闇の中からレイティスに話しかけてくる声がした。
レイティスは短く呪文を詠唱し、自らに結界を張った。
『そんなに警戒しなくても良い…。』
レイティスは壺を見た。さっき正面から見ただけなので気づかなかったが、壺の後ろの3重の魔方陣が足で擦った様に消されていた。
悪魔…シャックスは結界を抜け出し、外に開放されていたのだ。
ー…来るのが遅かったか。
レイティスが舌打ちをするが、声の主…おそらくシャックスは続ける。
『おぬし、名はなんと言う？ここに来ているくらいだ、Sの称号を

持っているのだろう。』
「お前に名乗る必要は無い。」
『ほぅ？やっと声が聞けた。なるほど…レイティス・S・ラストラルか。やはりSを持っていたか。』
「何故俺の名を知っている！」
シャックスはしわがれた声で笑った。
レイティスは警戒を解かず、じっと悪魔が出てくるのを待った。
『我は人の声を聞けば名くらいすぐに分かる。まぁ、聞く前から知っていたが…。ところで、おぬしラストラルと言ったな。』
「言ってはいない。」
『そんなにつんつんするな。その美しい顔に皺が残るぞ？』
そう言うと、いつの間にか寄せていた眉間の皺を突然何者かの指でグリグリされた。
驚いたレイティスは大きく後ろに跳んだ。
誰かが近寄ってきた気配は無かった。それに、自分の周りには結界を張っていったのに。
レイティスは警戒を強めた。
「…どこに居る！出てこい。」

―…ギィィイイ
突然、出入り口の扉が開いた。
深い闇に光が入る。
急に明るい光が入ってきて、レイティスは目を細めた。
　次第に目が慣れてくる。そして扉の中央に、一人光の中に佇んでいた。
「…おや？レイティス様、終わりましたかな。」
「逃げろ！アイティン！」
しかし、アイティンは逃げろと言われても逃げようとはしなかった。
むしろ、クックッと笑いはじめた。
「…アイティン？」

レイティスが思わず名を呼ぶ。
『ほら。出てきたぞ？』
アイティンの口から発せられたのはしわがれた、シャックスの声だった。

第１０話　憎悪

　アイティン――いや、アイティンの姿をした悪魔、シャックスは、突然レイティスにものすごい速さと飛躍力で押し倒す。そして、懐から鋭い短剣を出してレイティスの首筋に冷たい刃先を当てた。
「っっ！」
『アイティン…と言ったか？この身体は。』
「き、貴様、アイティンを…どう…した…！！」
切れ切れに言葉を紡ごうとする。
アイティンはレイティスより身体が大きいため、上に乗られると息が出来なくなる。
『この老いぼれか？我があの忌々しい壺から解放されたとき、こやつはいち早くここに来て封印しようとしていたのだが、この老いぼれ、Ａの称号を持ちながらも魔力がほとんど無くてな。すぐに身体をもらうことが出来た。我は何かこの世界の物質に憑依しなくては生きていけないからな。…しかし、この身体は重くて動きにくい。まぁ、もうこの身体は用済みだからいいか。』
　そう言うと、レイティスの首筋に当てていた短剣を躊躇なく自分の…アイティンの心臓に突き刺した。
レイティスの顔に返り血が散る。
　すると、さっきまでの邪悪な顔から、ふとアイティンいつもの顔に戻った。そして久し振りにレイティスを見たアイティンは驚いた様に目を丸くし、無理に手を伸ばし、レイティスの頬に触れる。少し、ほんの少し、微笑んだ。
「…あぁ、殿…下……。……すみません。わたしでは…食い止め…られなかった……。」
それがアイティンの最期の言葉だった。
　レイティスは力なく自分の上に崩れ落ちるアイティンに思わず手を伸ばす。信じられないといった様子で眺めていた。涙が一筋、レ

イティスの頬を流れた。
『さて、始めようじゃないか。』
楽しそうな声がどこからか響く。
その声を聞いて、レイティスの中にさっきまで有った悲しみから憎悪に切り替わった。
「貴様ぁぁあああっっ！！！！」
『ほぅ。なかなか良い目だ！』
レイティスは怒りに任せて魔力を爆発させた。とたん、レイティスを中心に黒い光が部屋全体を覆いつくした。
それは一瞬だった。黒い光が消えると、その部屋には何もなかった。
実際、この広い部屋1つ1つには結界が張ってあったので、辛うじてほかの部屋に被害は無かった。
レイティスは息切れしながら何もかも破壊しつくした（レイティス自身とアイティンの身体は除く）部屋を見回す。
「やったか？…う〝っ！」
胸に鋭い痛みを感じる。一気に魔力を使いすぎた。しかも3年のブランクがあるのに無茶をしすぎた。
これでは小1時間は魔法が使えない。まぁ、悪魔を倒せたのならそれで良い。

しかし、その考えは甘かった。

『派手にやってくれたじゃないか。』

その声を聞いて、レイティスは凍りついた。

第１１話　死への恐怖

「何故だ！？何故生きている？」
レイティスは誰も居ない部屋に向かって叫んだ。
もう、使える魔力がほとんど無い。このままでは…。
『生きていては悪いか？我は今、この空気中の酸素として漂っている。実際、あの爆発を大きな個体で受けていたらさすがの我でも死んでいただろうがな。分子レベルにまで小さくなれば、さほどの攻撃ではない。』
　この場をどうにかして切り抜けなくては…。
奴は今、分子レベルまで細かくなっていると言ったな。その大きさで人間を攻撃することは無理な筈っ！
　レイティスは残った体力で部屋の外へ走った。
アイティンを置いて。
―…あとで必ず、迎えに行く。
レイティスは心の中でアイティンに言った。

『無理だよ。』

　あと数歩で出口というところで、レイティスは息苦しさで走れなくなった。
…―息が、出来ない。
あまりの苦しさに首をつかむ。酸素を求めて口をパクパクと開く。
『言ったはずだ。我は今、この空気中の酸素に憑依していると。ここにある酸素を一点に集中させれば、ほかの場所に酸素は無くなる。』
　部屋の隅のほうでは空中に、まるで水の様に泡立っているところ

がある。そこが酸素の集合体──…シャックスの居場所。
レイティスはその場所を徐々に霞む視界のなかで捕らえた。
意識が遠のいていく。
手が、何故か震える。
『…死ぬのは怖いだろう？』
──…死。
言われて気付く。
自分は死ぬのが怖いのだと。だから、無意識に今まで力を欲していた。何をしてでも、力を手当たり次第に引き寄せた。死ぬのが、何より恐ろしかったから。
『力ある者は皆、死に恐怖してより強大な力を欲す。…レイティス、お主もそうだろう？』
今まで、死は怖くなかった。むしろ、死にたいとすら思った。誰か、自分を殺してはくれないかと。誰か、自分を自由にしてはくれないかと。
そうは思っていたが、無意識のうちに自分はそれを否定していたのだと今、思い知った。
死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない──……
今の自分の頭の中にはそれしかなかった。
「…し…死にたく……なぃ…！」
『…死は、怖いか？』
シャックスが再び問う。
レイティスは遠のく意識の中、首を縦に振る。
『命が…永遠の命が、欲しいか？』
意識せずとも首が勝手に縦に振られる。
『…それで良い。』

レイティスの記憶は、ここから先は再び目覚めるまで、切れ切れにしか覚えていない。

もうほとんど意識が飛びかけていた時、突然酸素が肺に流れ込んできた。

そして、その後シャックスになにか話しかけられたが、なんと言っていたかは覚えていない。

ここで完全に意識が途切れた。

第１２話　契約

《…レイティス。》
誰かに呼ばれて目を覚ます。
身体を起こすと、全身の筋肉が悲鳴を上げた。
「……痛っ！」
そこは冷たい石の床だった。床に寝ていたから身体中の筋肉が痛いのか。
《…起きたか？》
さっきレイティスを起こした声が何処からか降ってきた。
「…誰だ。」
《忘れたのか？》
…そうだ、忘れてはいけない。直ぐに思い出した。
ここはエーラン。シャックスの封印場所。そして、アイティンが…殺された場所。
「…シャックス。何処に居る？」
《思い出したか。我はお前の中だが？》
「俺の中だと？」
レイティスは部屋の中を見渡す。誰も居ない。強いて言うなら、アイティンの冷たい身体があるだけだ。
《おや？これは本当に覚えていない様だ。》
「何をした…？」
《お主は我と『契約』を交わした。》

…―悪魔との『契約』。
それは悪魔が魔法使いに遣えると言う契約。しかし、それは魔法使いが強制的にこの世界へ魔界から悪魔を呼び出して鎖で繋ぐのが普通だ。
悪魔が自ら魔法使いに契約をすることはまず無い筈だが…。

「…まさかっ！俺は契約を申し出た覚えは無い。それに……それにお前はアイティンを殺した。そんなお前と契約だと……？」
アイティンのことを思いだし、怒りが再び沸々と込み上げる。
《…我が契約を申し出た。それをお主が了解したのだ。お主は死の恐怖に負けたんだ。…その証しに左手首を見てみれば良い。》
レイティスはまさか、と言うように左腕の袖を捲り上げた。
手首には大きな傷後がくっきり残っていた。

悪魔との契約には魔法使いの血液が必要で、左手首を切り、その血を悪魔の『契約書』に垂らす。それで契約は成立。その悪魔は魔法使い―…主人が死ぬまで、もしくは悪魔自身が死ぬまで遣えなくてはならない。

「…お前自ら契約を申し出ただと？」
頭がおかしい。
レイティスはそう思った。普通は自らを鎖で繋ぐ様な真似は悪魔はしない。
《そうだ。》
「何故？」
シャックスは淡々と喋りだした。
《我がソロモンに封印される前、我はあらゆる主人に尽くしてきた。だが、どの主人も様々な国の王に遣える者だった。我の様な上級階級の悪魔を召喚できる者は、ほとんどSの称号を持つ者。だから宮廷の魔法使いだったんだ。…己の命を顧みず、王に尽くす者たちだ。全くつまらなかった。我は死に恐怖したあの顔を見たかったのに…。》
シャックスはため息をついた。それは至福に溺れる様なため息だった。
《そしてソロモンに封印されて１０００年余り…。封印が一度は破れかかったものだから、我は外に出ようとしたが、直ぐに魔法使い

がやって来て我を再び封印した。その時、我は大人しく壺に入る振りをして魔方陣に小さな『ほつれ』を作っておいた。そしたら、どうだ？１００年後には封印が自力で解けるようになったではないか！我はあえてこの部屋から出なかった。誰か、面白い魔法使いが来ると期待していたんだ。そしてお主がやって来た。…お主は我の願いを叶えた。我はそれを望んでこの忌々しい部屋を出なかったのだ！そしてお主は死を恐れ、我に命乞いをしてきた。……あぁ！思い出すだけで笑いが込み上げる！》

「止めろっ！！」

レイティスは叫んだ。

余りに大きな声で突然叫んだので、思わずむせる。

《…まぁ良い。そう言うわけで我はお主が気に入った。お主のためにこのシャックス、これまでの主人よりも尽くしてやろう。そして…》

レイティスは自分の中でシャックスがニヤリと笑うのを感じた。

《お主に、永遠の命を約束しよう…。》

永遠の命…。

レイティスはこの言葉に魅力と希望、そして死からの恐怖を忘れると言う事を期待してしまった。

もう、死の恐怖には勝てない…。

しかし、シャックスはアイティンを殺した。

それでもレイティスはまだこの悪魔の言う永遠の命が欲しいのだ。

仲間の死を見捨ててまで……。

　頭の中で様々な想いが交差する。

そして…

「…それでも、俺はお前を許さない。」

《契約は破棄しないと言うことだな。…それで良い。》

レイティスはこの後、シャックスの言葉を受け入れた事を強く後悔する―…。

第１３話　報告

エーランでの騒動の次の日、朝早くにレイティスは宮廷へと戻った。
宮廷に着くなり、国王からの呼び出しを受けた。
すぐに国王の謁見の間へと行く。
「随分と帰るのが遅かったではないか。」
レイティスが部屋に入ると、早々に国王メイティスが言った。
レイティスは幾段か高い位置にある玉座に座るメイティスへ跪いて軽く頭を下げる。
「ただいま戻りました。」
メイティスは表を上げよとレイティスを立たせ、本題に入る。
「さて、特級魔法使いレイティス・Ｓ・ラストラル。報告を。」
「はっ。…昨日、エーランにてソロモン７２柱序列４４番シャックスの封印及び結界の老朽化、破損を確認。悪魔の外のへ解放は確認されておらず、至急封印及び結界の再構築を致しました。また、その他悪魔の封印などには影響は無く、正常と確認しました。…以上です。」
報告を終えると、冷や汗が背中を伝った。
≪おや？我は封印されていない筈だが…？≫
「なっ！？」
突然シャックスに話しかけられる。レイティスはとっさに小さく声を上げた。
恐る恐るメイティスの顔を見る。
「…？どうした？」
メイティスは突然声を上げたレイティスを不審に見た。
≪安心しろ。我の声はお主以外には聞こえない。≫
「そ、そうなのか…。」
つい口に出して返事をする。そんな息子を見てメイティスはさらに

不審を抱いた。
「どうしたのだ？先程からおかしいぞ？」
「い、いえ！…昨夜の結界の再構成で体調があまり優れなくて…」
慌てて適当に理由をつける。
メイティスはそうかと言って特にそれ以上言わなかった。
よかった、と安堵するレイティス。
≪…お主が口に出してどうする。いちいち口に出さずとも我には聞こえるぞ。≫

ところで…、とメイティスは他の報告書を読みながら何気なく聞いた。
「エーランと言えば、アイティンが居たな。あやつは報告書の提出をしないからどうしているのか、まったく分からぬ…。どうだ、息災か？」
「え…あ、はい。相変わらず…。」
アイティンは死んだ。
そしてそれはシャックスが殺って、今は自分と契約している…そんな事を言った日には勿論処刑は免れないだろう。
アイティンがシャックスに殺された、と言うのはまだレイティスのせいではないのでなんとも無かっただろうが、その殺した悪魔と契約をした…即ち、ソロモン72柱を解放したことが知れたら大変なことになる。
まず、中級以上の悪魔との契約は禁じられており、違法契約者として処刑に値する。上級悪魔ともなればどうなることか…。
そういう訳で、アイティンは生きている、ということにした。都合のいいことに、アイティンは国王の信頼を買っていて、どんなに報告書の提出をしなくてもなにも咎められない。
また、アイティン以外にエーランにいる人間は居らず（下級悪魔はたくさん居て、警備もそれにやらせていた。今はアイティンが死んだため、悪魔たちは開放されている）、エーランに赴くものもレイ

ティス以外に居ない。実際、エーランの場所を知っているのはアイティンとレイティス、国王の3人だけだ（何者かに悪魔が解放されない為で、エーラン事態を知っているものは極わずか。また、エーランには外から見えないような魔法がかかっている。）。なので、シャックスが解放されたなどだれにも分からない筈だ。
「…そうでした。父上、また悪魔の封印及び結界の老朽化や破損が今回のようにぎりぎりにならぬよう、私にすぐに分かるような魔法をかけさせていただきました。」
一応他の悪魔の封印等は問題なかったが、アイティンが居ないので念には念をと思い、魔法をかけたのだ。
「そうか。…報告ご苦労。下がれって良いぞ。」
「失礼します。」
レイティスが出口まで来ると、メイティスが思い出したように言った。
「そうだ。忘れていないとは思うが、ちょうど1週間後にはお前の王位継承式だ。」
「…分かっております。」
レイティスは謁見の間を後にした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5615v/

特級魔法使いの苦悩

2011年10月11日11時09分発行